

## 結核患者ニ於ケル種痘ニ就テ

東京市療養所

熊谷安正

境野賢

高橋進

大正十三年一月東京地方ニ天然痘ノ流行アルニ際シ、我東京市療養所ニ於テハ其收容患者全員ニ對シ種痘ヲ行フベキ必要ニ迫ラレタリ、從來結核患者ニ於ケル種痘ニ就テハ明カニ指示セラレタルコト寡キガ如ク、偶々實地家ヨリ質疑サルルコト一再ナラザリシカバ、所長田澤博士ハコノ好機ニ於テ今回ノ種痘ノ實際ヲ觀察報告スベキヲ余等ニ命ゼラレタリ。

茲ニ於テ回顧スルハ一昨年秋「コレラ」流行アリタル時、我醫局同人ガ當時收容ノ患者ノ多數ニ就キ「ツクチン」注射ヲ行ヒタルコトアリ、之ニ關シテハ既ニ溝淵忠雄學士ニヨリ發表セラレタルガ如ク（本誌第一卷第一號）、「コレラ」流行ニ際シテハ結核患者ニモ適當ノ注意ノ下ニ「ワクチン」注射ヲ行フニ躊躇セズトノ見解ガ得ラレタリ、種痘ニ於テモ余等ハ初メヨリ恐ラクハ同様ノ結論ヲ得ンコトヲ想像シタルニ實際ニ於テ果シテ然ルヲ確メタリ。今コレヲ報告セントシテ、其平凡ニ過ギテ貴重ナル紙面ヲ塞グヲ憚ルト雖モ、次ノ如キ二三ノ疑點ニ對シテハ聊カ寄與スルモノアルベキヲ信ズルモノナリ。

(イ) Feer, Mehling, Bursch, Strimpel, Sahli 氏等ノ著及其他ノ成書ニハ、結核性疾患ノ小兒ニ於テハ、種痘ニ際シソノ腺病質發現シ症狀増悪スルガ故ニ健康ニ恢復スルマデ種痘ヲ延期スベキヲ説ク。既ニ罹病セル成人ノ結核ニ於テハ如何ナルベキカ。

(ロ)内務省種痘施行心得ニ種痘ヲ猶豫スベキ健康状態ヲ指示セル中ニ、(一)著シク榮養障碍ニ陥レル者、(四)熱性病又ハ重症疾病ニ罹リ居ル者ヲ擧ゲラレ、流行時ハ此限リニ非ズトアリ。急性傳染病ニアリテハ例ヘバ駒込病院ニ於ケル實際ハ流行時ハ收容中ノ患者全般ニ就テ種痘ヲ行フト云フ。肺結核ノ如キ慢性疾患ハ如何。

(ハ)天然痘ニアリテハヨク呼吸器系ノ合併症ヲ見、而モ其ノ著明ナルモノハ豫後不良ナリトセラレ、第一期種痘ニ於テモ往々氣管枝加答兒等ヲ見ル。既ニ呼吸器疾患アル者ニハ種痘ニヨリ咳嗽喀痰ノ増加等胸部症狀ニ何等カノ影響アルコトナキヤ。

(ニ)發疹ヲ特徴トスル疾患中、カノ麻疹ノ發疹期中ニハ以前陽性ナリシ「ツベルクリン」反應ガ陰性トナル、之所謂「子ガチーブエ、アチルギー」ニシテコノ期間結核性ノ抗體ガ其作用ヲ失フナリト説カル、ガ、種痘ニ於テモ這般ノ關係ノ存スルコトアリヤ否ヤ。

今文獻ヲ按ズルニ、一九一九年(O. Hirsch)ハ「カイゼリン、ヴィクトリア」療養所ニ於テ當時獨逸ニ於ケル天然痘流行ニ際シ必要上收容患者(相當重症ナルモノ多シ)ニ就キ種痘ヲ行ヒタルガ、同氏ニヨレバ、(一)結核患者ノ種痘ハ患者ニ殆ドサシタル影響ヲ與ヘズ、(二)種痘期間中以前アリシビルケ反應ノ消失スルコトナシト云ヘリ(Bairidge & T. G. Turner, *Berkulose Bd. 42*)。即チコレニヨリ前掲ノ疑問ハ既ニ確答ヲ與ヘラレタルモノ、如シ。余等ノ觀察亦大體コレニ一致シ此ノ成績ヲ確定シタルコトトナリタリ。

余等ノ種痘ハ大正十三年一月十七日及十八日ニ於テ施行シタリ。當日危篤ニ瀕シ居タル六名及大咯血中ナリシ一名ヲ除キ、殆ド全部ノ收容患者ニ就キ症狀ノ輕重合併症ノ如何ニ拘ラズ之ヲ行ヒ、其員數男女六三〇名ナリ。接種痘苗ハ一半ハ傳染病研究所製造、他半ハ北里研究所製造ノモノニシテ、二三日前製造ノ新鮮ナルモノニ係ル。術式ハ切種式ニヨリ殆ド全部左上膊ニ四顆ヲ植エ、特ニ榮養沈衰セル末期患者ニハ慎重ノ注意ヲ以テ接種シタリ。成績ハ第六日ノ検査ニヨリ判定シ、一顆以上小硬結或ハ水疱ノ形成アルモノヲ以テ善感ト認メタリ。

今其成績ニ就キ述ベシ。

全員六三〇名中、未種痘者三名、未ダ第三期種痘ヲ完了セザル者八名、天然痘ヲ經過セシ者七名アリ。其他ハ全部第二期種痘ヲ完了シタル者ニシテ、時々臨時種痘ヲ受ケタリト云フ者モ相當アリシガ、五年以内ニ行ヒタルモノハ少ク、年齢モ十五年以下ノモノ二十二名ニシテ全員ノ三・五%ニ過ギザリキ、從テ大多數例ハ前回ノ種痘ヨリ五年以上ヲ經タル者ナリキ。

六三〇例中、善感者四七五名ニシテ、其比率七五・四%ナリ。

ツルバン、ゲルハルトノ病期ニヨリ分類シタルニ、第一期患者一三九名中一二三名(八八・五%)、第二期患者二四一名中一七三名(七一・八%)、第三期患者二五〇名中一七九名(七一・六%)ニ於テ善感ヲ見タリ。

病期ノ如何ト、病勢トハ必ズシモ一致セズ、第二期、三期ノ患者中ニテモ榮養佳良ニシテ病勢停止ノ状態ニアル者モアリ。之ヲ以テ先ヅ臨牀徵候中最モ主要ナル熱候ノ狀況ト種痘成績トノ比率ヲ見タルニ、無熱患者九三名中八〇名(八六・〇%)、一日最高三七度五分以下ノ輕熱患者二五二名中二二四名(八四・九%)、三十八度内外ノ中等度有熱患者二〇三名中一三五名(六六・五%)、三十八度五分以上ノ高熱患者八二名中四六名(五六・一%)ハ種痘善感ヲ示シタリ。上記ノ無熱患者九三名中能ク吟味シテ相當重症ナル者一八名ヲ除外シタル殘リ、七五名ハ榮養極メテ佳良、概テ病勢停止シテ一見殆ド健康者ト選ブナキモノナルガ、コレ等ノ中ニハ六七名(八九・三%)ノ善感者アリ。之ト對照センガタメ最重症者トシテ種痘後六週間以内ニ鬼籍ニ登リシ者ノ全部六七名ニ就テ調べタルニ其三五名(五二・二%)ニ於テ善感ヲ見タリ。

種痘期間ニビルケ氏皮膚反應ヲ試ミタル例二一七名アリ。此内前記ノ最輕症者ニ屬スル者四〇名アリ、全部陽性、最重症者ニ屬スル者一八例ニシテ全部陰性ナリキ。而シテビルケ氏反應陽性例一四五名中ノ善感者一〇九名(七五・二%)ニシテ、同反應陰性例七二名中ノ善感者ハ四五名(六二・五%)ナリキ。

尙約三〇例ニ於テ種痘前後ノビルケ氏反應ヲ比較シタルニ、前後ノ差異殆ド認ムベキモノナカリキ。以上ノ成績ヲ通覽スルニ、大多數ハ前回ノ種痘ヨリ五年以上ヲ經過セルモノナルガ故ニ個人ノ免疫性如何ト云フ點ハ度

外視スルヲ得ベク、而シテ一般ニ重症有熱患者ノ榮養不良ナル者ニアリテハ、輕症ノ無熱又ハ微熱ニシテ榮養佳良ナル患者ニ比シテ善感率小ナリト云フ結果トナレリ。コレノ偶然的ノ事實ナルカ、或ハ末期患者ノ皮膚ハ榮養枯槁シテ皸瘰ニ富ミ、術式施行ガ相當困難ナルタメニ失敗ノ伴ヒ易キモノナルカ等種々顧慮セザルベカラザルモノアレドモ、又皮膚器管ノ機能沈衰又ハ反應力減退等注目ニ値スル事項モ考ヘラレザルニアラズ、コ、ニハ唯事實ヲ記載シ置クニ留メントス。

次ニ、種痘ガ臨牀上ノ結核徵候ニ及ボシタル影響如何ニ就テ述ベン。

第一、自覺症狀トシテハ、(イ)全身違和ノ感ヲ訴ヘタルモノスベテ三五名ニシテ全患者ノ五・六%、(ロ)惡寒ヲ訴ヘタルモノ三五名、五・六%、(ハ)咳嗽、喀痰ノ増加セシヤノ感アリト訴ヘタルモノ二五名、四・九%ヲ出セリ。是等ハ比較的神經過敏ニシテ訴ヘ多キ結核患者トシテハ寧ロ僅少ナルモノト見ラルベシ。

第二、他覺的ノ症狀トシテハ先ヅ(イ)熱候ニ及ボシタル影響ヲ見ントシタルガ、中等度以上ノ有熱患者ニ就テハ這般ノ影響ヲ究ムルコト困難ナルガ、兎ニ角種痘前後各凡ソ十日ノ平均體溫ヲ比較シタルニ、特ニ甚シキ昇降アルモノヲ發見セザリキ。無熱患者並ニ輕熱患者三四五名中ニ於テ、種痘前ヨリ四乃至五分高溫ヲ示シタル者四名、一度以上ノ熱發アリタルモノ六名ヲ見タリ、コレ等一〇名ハ、右輕熱患者全部ノ約三・〇%ニ相當ス、而シテコレ等ノ熱ハスベテ一過性ニ下降シ胸部症狀ニ不良ノ影響ヲ與ヘタルモノナカリキ。

次ニ(ロ)喀血又ハ血痰ニ何等カノ影響ヲ及ボシタルモノナキヤヲ檢シタルニ、當日偶々大喀血中ナリシ一例ニハ施行セザリシコト前述ノ如クナルモ、當時毎日血痰ヲ見タリシ一〇例ニ於テハ全部種痘ヲ行ヒ、ミナ善感ヲ示シタルモ特ニ不良ト思ハル、影響ヲ認メズ。又、殆ド月餘ニ互リテ持續セル血痰ト止ミテ二日ナルモノ及ビ、同上四日ナルモノニ施行シテ善感ヲ見タレドモ血痰ニハ影響ナカリキ。種痘後ノ十日間ニ於テ血痰ヲ喀出シ數日持續シタルモノ三名、喀血一回ノ後數日ノ血痰ヲ來シタルモノ三名アリ、後者中ノ一名ハ不善感、他五例ハ善感ナリキ。而シテコノ六名ハ全患者ノ一〇・〇%ニ充タズ。十日間ニカクノ如キ率ノ血痰喀血ハ重症者多數ナル我療養所トシテハ寧ロ日常ノコトニ屬ス、況ヤ

コレ等ノ患者ガ皆平素咯血癖ヲ有スル例ナリシヲ以テ觀レバ其責ヲ種痘ニ嫁セントスルハ失當ナラント考ヘラル。以上ノ外、七年ノ小兒(第一期、肺結核)ノ未種痘者ナルモノニ於テ強度ニ善感シ淋巴腺炎ヲ併發シタルモノアリ。輕症無熱患者ニテ強度ニ善感シ一度以上ノ一過性、熱發アリシ中ノ一例ノ於テ、腋下淋巴腺ノ腫脹ヲ見タルモノアリ。又一例ハ肩胛部ニ於テ、一例ハ側胸部ニ於テ搔痒ニヨリシモノ思ハル、ト著明ノ副痘ノ形成ヲ見タリ。

カクテ今回ノ種痘成績及ソノ影響ニ關シテ觀察シタル所ヲ綜合スレバ、余等ハ結核患者ニモ天然痘流行時種痘ノ必要ナル場合ニハ之ヲ施行シテ殆ド顧慮スベキ不良ノ影響ヲ認メズ、末期患者ト雖モヨク善感スルモノ多數ナルヲ以テ、場合ニヨリテハ之ニモ種痘ヲ強制スルヲ妨ゲズト考フルモノナリ。

終リニ、有力ナル助言ヲ與ヘラレタル傳染病研究所城井博士ニ謝意ヲ表シ、所長田澤博士ノ校閲ヲ謹謝ス。  
(本稿ハ第二回結核病學會ニ於テ演說シタルモノナリ)。